



# ほっとほっとタイムズ—第5号—

2025.11.7

井荻小学校 特別支援教育校内委員会  
教育アドバイザー住谷陽子

秋を楽しむ暇もなく冬の訪れを感じる今日この頃、皆様、お元気でお過ごしでしょうか。日々の出来事に追われているうちにあっという間に2学期も後半になってしまいました。

先日、千葉県の田舎にある知り合いの幼稚園を訪れる機会がありました。あたりは見渡す限りの田んぼと畑が広がる中に、ログハウスの園舎が建っていました。もちろん、中はすべて木造。広々としたホールもあり、玄関先には、壁一面本棚で囲まれた空間があり、読み聞かせを聞くには最適の場所でした。園庭には手作りの遊具があり、近くには草花の散歩道があり。不思議なことにそこにいるだけで心が和み、安心して何でもしゃべれる気分になりました。一番感じたことは、本当の豊かさって何だろうということでした。人間は、豊かさを求めて、より便利により快適に街を作ってきたのだと思うのですが、その結果として、人々は周りを気遣うことが多くなり、豊かなはずなのに心安まらなくなっているのではないだろうか。

最近、2歳児の電車好きの幼児と半日過ごす機会がありました。私の持っていたバッグのファスナーに目が留まった彼は、ファスナーを線路に見立て、ファスナーを開けたり閉めたりしながら電車ごっこを始めました。30分くらいはずっと楽しんでいただけでしょうか。以前の私でしたら、忙しい気持ちが優先して早く切り上げさせることを考えたと思いますが、気持ちにゆとりのある今は、彼が満足してやめるまでそれに付き合っていました。大人にとっては無駄に思える行為も、子どもにとってみれば自分が始めたこと(主体的活動)で、きっと楽しい行為。それを思う存分楽しめたことで、満足感だけでなく、集中力や活動の楽しさ、そして付き合って共感してくれる人に対する信頼感など、目には見えない大きなものが育っていつているのだろうと感じるひと時でした。

教育の場では「主体的な学び」「探究的な学び」といった言葉が盛んに聞かれます。しかし、大きな目で見ると子どもの生活の中では「主体的に」「探究的に」過ごせる時間はどんどん少なくなっているように思います。本来、遊びの場がそうした役割をもっていたと思うのですが、今の世の中では、幼児の頃からそうした自由な時間も自由な空間もうんと狭くなっているのが現状ではないでしょうか。学校生活においても「先生〇〇ちゃんが〇〇した」と現状を訴えてくることは多いのですが、「それでどんな気持ち?」「あなたはどうしたいの?」「見ていてあげるから自分で〇〇と言ってみれば?」などと声かけしないと動き出せないことが多い気がします。生活の中で主体者になれないのに、学習の場でだけ主体的になるのは難しいのではないのでしょうか。このあたりに、家庭と学校が協力しながら子育てをする鍵があるように思われます。

価値観が多様化してきている世の中、これからますます「主体的」「探究的に」生きる力を求められることでしょう。そうした未来を生きていく子どもたちに、私たち大人は今、どんな生活を提供していくことが大切なのでしょう。時には視野を大きくして考えてみることも大切な気がします。そのためには、大人の間人間関係もおおらかに(まずは信じてみる、少々の失敗はお互いに許し合うなど)ならないと実現しないだろうと感じています。学校がそんな場であることを願っています。

学校は今、展覧会に向けての準備を進めています。それこそ、子どもたちが「主体的」にモノづくりに取り組んだその子らしい作品がたくさんそろってきています。忙しい毎日ではありますが、秋のひと時、子どもの世界をともに楽しみ、子どもの思いに共感し合う時を過ごしていただけるとありがたいです。

